

詩跡(歌枕)研究による中国文学史論再構築

—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—

研究課題番号 17320053

平成17年度～平成19年度 科学研究費補助金

(基盤研究(B)) 研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者 植木 久行

弘前大学人文学部教授

詩跡(歌枕)研究による中国文学史論再構築

—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—

研究課題番号 17320053

平成17年度～平成19年度 科学研究費補助金

(基盤研究(B)) 研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者 植木 久行

弘前大学人文学部教授

はしがき

本書は、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—」の研究成果に関する報告書である。

本研究の目的は、詩跡の概念・機能・形成を詳しく探求し、詩跡がひろく中国文学全体のなかで、どのような役割を果たしてきたかを考察することである。詩跡とは、単なる地名ではなく、歴代の詩人たちが詠みかさね、刻みつけてきた詩心の伝統を深々とたたえる、古典詩語と化した地名を指し、特定の豊かな詩情と長い風雅の伝統を瞬時に喚び起こす機能を備えている。それはまた、当地を訪れた詩人たちの詩情に点火し、新しい創造への源泉にもなった。

こうした中国の詩跡研究は日本独自の発想であり、中国の学界では全く見られない研究領域として、日本文学の歌枕・俳枕研究の手法と成果を参照している。詩跡の多くは、当地を実際に訪れた詩人たちの創造にもとづくという点では、「現実の見聞の上に立ち、俳諧の目からとらえ直された」（尾形侑『俳枕考』）俳枕に近いが、辺境の地では、「居ながらにして詠む」歌枕に近い場合もある。詩跡に刻まれた詩心の特色を探る試みは、将来、歌枕・俳枕研究にも示唆を与えることになるだろう。

本研究の課題を多角的に論究するために、毎年1回、研究会を開いた。平成17年度は、植木「第1次中国詩跡調査の目的地とその意義」、李「文化景観としての詩跡—風景論の立場に基づいて—」、伊藤「平安朝物語に見る異境としての唐土^{もろこし}」、松尾「『詩跡』の発見」、許山「杜牧と揚州」のほか、俳枕の研究者として早稲田大学名誉教授・堀切実、詩跡の研究者として愛知淑徳大学教授・寺尾剛の2氏を招いて、それぞれ「俳枕考」、「地図に記載できない地名をどう扱うか？—架空詩跡の問題を中心として—」を発表していただいた。

続く平成18年度は、植木「竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』に対する論評—将来の詩跡辞典作成構想と関連させつつ—」、松尾「南宋時期の書物に見られる詩跡的観点について」、許山「長安と詩人杜牧—長安出身の詩人と比較して—」のほか、今回は俳枕方面の研究者として東京学芸大学教授・嶋中道則、歌枕方面の研究者として群馬大学教授・藤本宗利の2氏を招いて、それぞれ「俳枕の諸相」「歌枕の変遷—信太の森をめぐる—」を発表していただいた。各自の発表に対しては、招待の研究者を交えて活発に議論し、詩跡・歌枕・俳枕の概念・機能・形成に対する知見を深めた。

そして最後の平成19年度は、植木「中国歴代の地理総志に見る詩跡の著録とその展開—安徽省宣城市区・池州市、および山東省済南市区を通して—」、許山「『瘴』字考」、李「景観形成における詩跡の位相—中国での詩跡調査を踏まえて—」、伊藤「『浜松中納言物語』における唐土造形の方法」、松尾「実地調査を踏まえた詩跡のあり方についての一考察

—池州を例として—」であり、報告書の作成に向けても議論を重ねた。

他方、初めの2年間は、風土が持つ本質的情感や現状を見聞・体験する実地踏査が重要不可欠である、という認識の下に、年に1度、1人（日本文学研究者）を除く4人で、中国の詩跡の実地調査と資料・情報の収集を行うことにした。本研究は、多様な文献・資料にもとづく分析に加え、現地調査を重視した点にも特徴があるため、関連資料の収集と詩跡の写真撮影につとめた。特に刻々と変化する現状を映し出す詩跡の写真には貴重なものも含まれているので、これを報告書中に【附編】として、調査行程記録とともに一部掲載することにした。

本報告書のなかには、○詩跡を著録する文献研究—南宋期の『輿地紀勝』『方輿勝覽』等の価値を解明しつつ、詩跡の全体像と詩跡認識の広がり进行を考察したもの、○実地調査した安徽省の、個性的な詩跡研究の具体例、○一種の詩跡辞典とも見なしうる竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』（岩波書店、2006年）が抱える諸種の問題点を論じたもの、（以上、植木）○詩跡概念が明確化する宋代、特に南宋期の地方志を調査して詩跡的観点の形成と普及の様相を論じたもの、○実地調査した池州市（安徽省）の2つの詩跡形成（齊山と杏花村）を通して見た、作品の継承性と現実の詩跡の様相との比較、（以上、松尾）

○「瘴」字の用法を通して見た、中国古典詩人における南方意識の変遷を論じたもの、（許山）○文化景観形成における詩跡の位相を論じたもの、（李）○平安時代の物語世界の造形と詩跡・歌枕の利用を考察したもの、（伊藤）の諸論考を含む。

以上の論考は、3年間にわたる研究活動の主要な成果であるが、今後に残された課題も少なくない。忌憚のないご批判と懇切なご教示を切望する。

（植木 久行）

平成17年度～平成19年度科学研究費補助金・基盤研究（B）

「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—」

研究組織

研究代表者	植木 久行	（弘前大学人文学部教授）
研究分担者	李 梁	（弘前大学人文学部准教授）
研究分担者	伊藤 守幸	（学習院女子大学国際文化交流学部教授）
研究分担者	松尾 幸忠	（岐阜大学地域科学部准教授）
研究分担者	許山 秀樹	（静岡大学情報学部准教授）

交付決定額（配分額）

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	3,000千円	0円	3,000千円
平成18年度	2,400千円	0円	2,400千円
平成19年度	1,900千円	570千円	2,470千円
<hr/>			
総計	7,300千円	570千円	7,870千円

研究発表

(1) 学会誌等

- 植木 久行 「正確な読解と綿密な調査の「基本」を求む—竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』論評—
『中国詩文論叢』第25集、2006年12月
- 植木 久行 「中国詩跡考1（安徽省）」
『人文社会論叢（人文科学篇）』（弘前大学人文学部）第17号、
2007年2月28日
- 植木 久行 「中国歴代の地理総志に見る詩跡の著録とその展開—安徽省宣城市区・池州市、および山東省済南市区を通して—」
『中国詩文論叢』第26集、2007年12月
- 松尾 幸忠 「南宋の地方志に見られる詩跡的観点について」
『中国文学研究』第32期 2006年12月
- 松尾 幸忠 「池州における二つの詩跡—斉山と杏花村」
『中国詩文論叢』第25集、2006年12月
- 許山 秀樹 「中国古典詩人における南方意識—「瘴」の字を手がかりに—」
『中国詩文論叢』第26集、2007年12月

(2) 口頭発表

- 植木 久行 「中国歴代の地理総志に見る詩跡の著録とその展開—南（安徽省池州市）と北（山東省済南市区）の実例を通して—」
早稲田大学中国文学会 第32回秋季大会
2007年12月8日、早稲田大学文学部第1会議室（33-2号館）

目 次

はじめに

[研究報告篇]

- 中国歴代の地理総志に見る詩跡の著録とその展開 植 木 久 行 1
—安徽省宣城市区・池州市、および山東省済南市区を通して—
- 中国詩跡考 植 木 久 行 33
—安徽省—
- 正確な読解と綿密な調査の「基本」を求む 植 木 久 行 51
—竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』論評—
- [附] 竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』札記 植 木 久 行 61
- 南宋の地方志に見られる詩跡的観点について 松 尾 幸 忠 111
- 池州における二つの詩跡 松 尾 幸 忠 119
—齊山と杏花村—
- 中国古典詩人における南方意識 許 山 秀 樹 131
—「瘴」の字を手がかりに—
- 景観形成における詩跡の位相 李 梁 145
—中国江南の古城鎮江の場合—
- 『浜松中納言物語』に描かれた和漢混淆的世界 伊 藤 守 幸 157
—物語世界の造形と詩跡・歌枕の利用をめぐる—

[附 編]

- 詩跡の調査行程記録と詩跡関連写真 説明…植 木 久 行 167
—補遺1・2の文を含む— 写真…許 山 秀 樹